様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：２７１０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１７２７０

研究課題名（和文）大腿骨骨折を経験した女性高齢者への支援に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on the methods of support for the elderly women who experienced hip fracture

研究代表者
畑　香理（HATA, KAORI）

福岡県立大学・人間社会学部・助教

研究者番号：９０６２５３１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、大腿骨骨折を経験した女性高齢者の在宅復帰に向けたソーシャルワーク実践に関して、病院から在宅へ移行する際の効果的な支援方法を検討することである。まずは基礎的な研究として、回復期リハビリテーション病棟の入院患者への支援について、アンケート調査を実施し、現状と課題を整理した。
　その結果、医療ソーシャルワーカーの支援状況では男性に比べ女性への家事支援が多く実施されていた。女性高齢者への支援では、家事や家庭内役割の維持に関する内容を重視した支援が重要であることが考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　高齢化の進行に伴い増加傾向にある大腿骨骨折患者の中でも、特に女性の高齢患者に焦点をあてた退院援助に関する研究はほとんど行われていない。加えて、在宅復帰に向けた退院援助が活発な回復期リハビリテーション病棟におけるソーシャルワーク実践の研究も少ない。そこで本研究では、病院から在宅生活へと移行する際の効果的な支援方法を探求し、大腿骨骨折を経験した女性高齢者が抱く不安を軽減できるようなソーシャルワーク実践方法を検討することを目的とした。大腿骨骨折患者の抱える困難や在宅生活に移行する際の課題を明らかにすることは社会的に意義があり、さらに本研究によってソーシャルワークの可能性を提示することもできる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to investigate the method of effective support in social work practice when the elderly women who experienced hip fracture discharge from hospital to home. A questionnaire survey was conducted to identify the current status and issues about the method to support patients admitted to the convalescent rehabilitation ward.
　The collected data reveal that the implementation status of housework support for women arranged by MSW is higher than what for men. Considering the result, it would be important that MSW helps the elderly women can have roles of housework and a member of family.

研究分野：保健医療福祉

キーワード：大腿骨骨折　女性高齢者　ソーシャルワーク　退院援助

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「大腿骨頚部骨折の発生頻度および受傷状況に関する全国調査」（萩原ら 2003）によると、大腿骨頚部骨折患者のうち、女性は男性の倍以上の発生率で 80～84 歳が最も多く、高齢であるほど軽微な外傷が受傷原因となっている。さらに治療後は、ＡＤＬ低下や介護の必要性が認められている。わが国は超高齢社会に突入しており、独居高齢者や高齢夫婦のみの世帯が多いという現状がある。高齢者の増加に伴い、大腿骨骨折患者の発生数が増加しており、受傷後も安心して高齢者が在宅生活を送れるよう入院中から支援することは重要である。そこで期待されるのが医療ソーシャルワーカーの行う退院援助である。この退院援助は医療ソーシャルワーカーの中心的業務であり（小原 2004)、筆者が 2008 年に実施した調査によると、回復期リハビリテーション病棟（以下、回復期病棟）から自宅へ退院した高齢者の約 6 割は医療ソーシャルワーカーに対し退院に関する相談を行っていることが明らかとなった。さらに患者が求める退院援助の内容や支援の課題も明らかになった。また、「回復期リハビリテーション病棟の現状と課題に関する調査報告書」（一般社団法人回復期リハビリテーション病棟協会 2015）では、社会福祉士が配置されている病棟は 82.5%であり、7 割以上の病院において患者が在宅復帰していることが報告されている。以上のことから、回復期病棟では在宅復帰に向けた退院援助が活発に行われていることがうかがえる。しかしながら、回復期病棟を中心としたソーシャルワーク実践に関する研究は少なく、なかでも高齢女性の大腿骨骨折患者に焦点を当てた退院援助に関する研究は散見されない。

２．研究の目的

本研究は、大腿骨骨折を経験した高齢女性の在宅復帰に向けたソーシャルワーク実践に関して、回復期病棟の患者に対する現状と課題を整理し、多職種協働を基調とした、病院から在宅へ移行する際の効果的な支援方法を検討することが目的である。具体的には、女性高齢者に焦点をあて在宅復帰を目標とする大腿骨骨折患者の現状と抱える課題を整理すること、医療ソーシャルワーカーの退院援助方法と回復期病棟内外の多職種連携の特徴を把握することの 2 点を実施する。以上の点を基礎とし、大腿骨骨折を経験した女性高齢患者への効果的な退院援助方法を検討する。

３．研究の方法

本研究では、まず大腿骨骨折を経験した女性高齢者への支援と、医療ソーシャルワーカーが行う退院援助に関する課題について整理した。大腿骨骨折を経験した女性高齢者への支援については、性別にかかわらず高齢者全般への支援を取り上げ、先行研究を整理した。医療ソーシャルワーカーが行う退院援助については、回復期病棟での実践を中心とした課題を文献から整理した。

次に、先行研究等の内容を基に、医療ソーシャルワーカーが回復期病棟で行っている支援のうち、大腿骨骨折を経験した女性高齢者への支援の特徴を検討し、整理した。

そして、整理・検討してきた退院援助の課題や大腿骨骨折患者に対する支援の特徴等の妥当性や実際の実施状況を把握するため、調査を行った。調査方法は無記名自記式調査票による調査とし、(1) 男女別における大腿骨骨折の高齢入院患者に対する支援の状況、(2)「医療ソーシャルワーカー業務指針」に照らした大腿骨骨折の高齢入院患者への支援の状況の 2 点が明らかとなるような質問項目とした。調査対象は一般社団法人回復期リハビリテーション病棟協会のホームページ（http://www.rehabili.jp/, 2018 年 8 月 1 日アクセス）にて公開されているすべての病院であり、対象者は当該病棟に配置されている医療ソーシャルワーカーとした。調査期間は 2018 年 8 月 6 日から 2018 年 9 月 30 日で、回収率は 29.2%（345／1,181）であった。このうち、調査上必要な項目において未回答であった 6 名を除外した 339 名を分析対象とした。

なお、調査の実施にあたり、福岡県立大学研究倫理委員会の審査及び承認を得た（承認番号：H30-10)。

４．研究成果

まず、本研究で行った調査の回答者については、「男性」が 28.6%（ｎ＝97)、「女性」が 71.4%（ｎ＝242）であり、年齢層は「30 歳以上 40 歳未満」が 45.1%（ｎ＝153）と最も多く、次いで「40 歳以上 50 歳未満」が 27.7%（ｎ＝94)、「20 歳以上 30 歳未満」が 19.8%（ｎ＝67）の順に多かった。平均年齢は 36.6 歳であった。経験年数については、最も多いものが「5 年以上 10 年未満」で 35.7%(ｎ＝121)となっており、次いで「5 年未満」が 29.8%（ｎ＝101)、「10 年以上 15 年未満」が 20.4%（ｎ＝69）の順であり、平均経験年数は 8.3 年であった。取得資格について複数回答で求めたところ、「社会福祉主事」が 98.2%（ｎ＝333）と最も多く、「社会福祉士」97.1%（ｎ＝329)、「介護支援専門員」39.2%（ｎ＝133）の順に多かった。

次に、回答者がこれまでに担当経験のある大腿骨骨折患者のうち、65 歳以上の高齢者に関する設問では、最も多い年齢は「80 歳以上 85 歳未満」が 44.8%（ｎ＝152)、次いで「85 歳以上 90 歳未満」が 33.9%（ｎ＝115)、「75 歳以上 80 歳未満」が 10.6%（ｎ＝36）であり、80 歳代が全体の約 8 割を占めていた。世帯状況については、「夫婦二人暮らし」が 42.2%（ｎ＝143）と最も多く、次いで「一人暮らし」が 22.1%（ｎ＝75)、「夫婦二人と子の同居」が 13.0%（ｎ＝44）であり、高齢者のみの世帯が 6 割以上を占めていた。退院時に導入する介護サービスの

うち上位 3 つに関する設問においては、「福祉用具貸与」81.4%（ｎ＝276）が最も多く、次いで「通所リハビリ」が 54.6%（ｎ＝185)、「通所介護」が 49.0%（ｎ＝166)、「住宅改修費支給」が 42.5%（ｎ＝144）という結果となった。退院時に導入される介護サービスとしては、福祉用具や住宅改修等の住環境に関する整備や、通所サービスが多い傾向であった。

そして、大腿骨骨折患者のうち、女性の高齢入院患者に対する支援については、受傷前に家庭内で担っていた役割維持に関する支援が男性に比べると多く実施されていた。加えて、家庭内でこれまで担ってきた役割を果たせないもどかしさ・情けなさ、同居家族への気遣いや気兼ねなどの想いを傾聴することも男性に比べ、女性の高齢入院患者に多く支援が行われていた。その他に、退院後の屋外活動として、例えば散歩、買い物、受診時の移送、庭仕事等に関するサービスや趣味活動を見つける手助けについても女性の方がより多く支援が行われているという結果であった。今回の調査から、家庭内の役割維持や屋外での活動等における支援が女性の大腿骨骨折患者の支援のポイントになると考えられる。

さらに、回復期病棟における大腿骨骨折の高齢入院患者に対する支援の実際については、脳血管疾患及び廃用症候群の患者との支援実施状況に差があることが明らかとなった。また「退院援助」や「経済的問題の解決と調整」については、どの項目も支援がよく行われているものの、「地域活動」においては支援があまり行われていないことが明らかとなった。

「医療ソーシャルワーカー業務指針」は病院等の保健医療機関に配置されているソーシャルワーカーの標準的業務が示されたものであるため、所属機関の特性に応じて業務の実施状況は異なる。そのため、設問の内容によっては回復期病棟の特性や実情に合わない項目や高齢者への支援にあまり関わらない項目はほとんど支援が行われていないという結果であった。しかし、「地域活動」においては、それらの条件のいずれも満たさないことが考えられるが、ほとんど実施されていなかった。このことから、地域の関係機関等との連携において、患者会・家族会への支援、ボランティア育成、地域ケアシステムへの参画及び在宅ケア等の理解・知識の普及活動等の実施に関して課題があると考えられる。

今回の研究では、大腿骨骨折を経験した女性高齢者への入院中における支援のポイントや留意点等は明らかになった。一方で、回復期病棟の医療ソーシャルワーカーが行う多職種連携は病院内の他職種とは実施されているが、地域活動という点からは課題が残されているため、今後大腿骨骨折の女性高齢者への支援方法を具体的に検討する際に、さらに分析していく必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

畑香理、本郷秀和、「退院援助からみる医療ソーシャルワーカーの役割と大腿骨骨折を経験した人への支援－先行研究の分析から－」、『九州社会福祉学』、査読有、第 15 号、2019、25－36.

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。